



「福島、その先の環境へ。」
チャレンジ・アワード 2022

新戦略， ふくしま復興

浜通りに集う人を、どう増やすのか。

松原 理乃

関西学院千里国際高等部・3年

そもそも、 復興ってなに？

復興とは、答えがないもの。
人それぞれ、その答えは違う。

ふっ-こう【復興】

ふたたびおこること。
また、ふたたび盛んになること。
「災害から一する」
「文芸一」

出典：広辞苑

こわれたものを
元通りにすること
= 復旧

一度衰えたものを、
立て直すこと
= 再建

死にかかったものが、
生き返ること
= 再生

私は、"その地域が再び活性化すること、そして日常を取り戻すこと"だと思う。

巨大地震と津波、原発事故という未曾有の複合災害の発生から11年。福島は復興は着実に進んでいる。ただ、浜通りを訪れるたびに、綺麗な街や建物に、活気や温もり、生活感がないと感じる。どうしたら、浜通りが、再び興り活性化するのだろうか？壊された生業や営みが戻るのだろうか？



集う人を、どう増やすか

復興、そして福島を活性化させる第一歩は、交流人口を増やし、浜通りに集う人間の活力を、永続的に向上させることではないだろうか？

01. 日本国内から福島に訪れる人を増やすには？

02. 日本国内外から福島に訪れる人を増やすには？

03. 外部ふくしまファンの獲得

01. 国内から訪れる人を増やす

浜通りに、日常的にor定期的に居住する人、訪れる人を増やすのが、福島に集う人を増やし、活気づける方法の一つなのではないだろうか。震災の前から、浜通りは高齢化や過疎化が大きな問題であった。復興の過程を、それらの問題を解決していく良いチャンスと捉え、人口減少に悩む他地域のモデル、先駆けになるのはどうだろうか？

● 新しい農業人材の集うまち

浜通りに、雇用と収益を生み出さなくてはならない。目をつけるのは、第一次産業。
現在の日本は、第一次産業が衰退している。成り手も減り、食糧受給率も悪化の一途だ。
ただ、今や農業は、テクノロジーの力で、人の手がなくてもできる時代になってきている。
そこで、副業で就農する人を増やし、平日は他地域、週末は浜通り、という人材を増やすのはどうだろうか？
→アグリテック企業を誘致し、週末移住を推進する

● ワークেশヨンの聖地

02. 国内外から訪れる人を増やす

福島の地域的価値は、他地域の人々にとって、興味深いものが沢山ある上、これから創出することもできる。福島だからこそその価値で、国内外からの交流人口を増やしたい。

● 歴史を学ぶ地、フクシマ

伝承、震災の教訓。国道6号線の車窓、請戸小学校を見た時、心の底から衝撃を受けた。来て、実際に見て、学べてよかった。この経験をたくさんの人にしてもらいたい。

● 叡智が集まる地

浜通りを叡智の拠点とすることで、地域的価値が高まる。国内外の人々の興味を引く地になる。中でも、イノベ構想の分野は、世界のトップランナーになるだろう。そして、それは、福島と日本の誇りになる。

03. 外部ファンの獲得

今の福島は、基本的にファンベース。実際に福島に来てもらうのが一番理想かもしれないが、交流人口というのは、実際に現地に来なくても繋がっている人も含まれるはず。そういった域外消費層を、もっと獲得したい

● 特別なシーンに、"ふくしまのもの"

まず、桃をはじめとして、特別なシーンにふくしまのものを取り入れていただく方を全国で増やしていきたい。

● 日常のなかに、"ふくしまのもの"

次のステップとしては、全国の日常の中にふくしまのものが普通にあること。農産物の販路拡大以外の提案としては、ペットボトルの福島の天然水の全国販売を考える。環境に配慮した素材のペットボトルを使用するといった、他の水とは違う付加価値も付けたい。

風評被害対策が不可欠。

風評被害は、他地域の人たちの心の不安の実装。ALPS処理水の海洋放出、農作物の買い控え。分かりやすく、発信者と受信者の双方が納得し、合意に至ることのできるリスクコミュニケーションを推進しなければならない。

住民の方々に、歓迎して頂かないと始まらない。

案を出して強引に導入するのは望ましくない。浜通りの地元の方々に、新しいチャレンジを歓迎して頂かない限りは、復興は進まないだろう。

交流人口の拡大で、ふくしま復興の実現を。

私は、福島を訪問する度に、地元の復興のために、一生懸命な人がたくさんいるのを見てきた。復興を願う一人として、私が願う福島の未来は、



**"活力のみなぎる、
温かい福島" になって欲しい。**